

ぼんぼり祭と娘の結婚

大島幹雄

おおしま みるお ノンフィクション作家「石巻プロジェクト」代表、「サーカス」編集生「曲芸クラフ」・動物芸の文化誌「等」1993年 宮城県生民共



画・吉野晃希男

鎌倉の夏の風物詩ぼんぼり祭を初めて見たのは、いまから二年前のことである。鎌倉で働いている次女が教えてくれた。次女は仕事のため参加できず、東京でひとり暮らしをしている長女と妻の三人で見に行った。

立秋のお祭なのだが、まだ夏の真っ盛り、日中の鎌倉の街は、暑さでうだつていた。日が落ち、海から風がそよいでくると、街に澀んでいた熱気がすこしずつやわらいでいく。そんなとき鶴岡八幡宮の巫女さんたちが、参道に立ち並んでいるぼんぼりに灯をともしていった。薄暮のか小さな灯がともされ幻想的な宵がはじまる。鎌倉在住の各界の有名人や鶴岡八幡宮なじみのある人たちが描いた絵と言葉がぼんぼりの中から浮かんでくる。それをサクサクと音をたて砂砂利を踏みながら、時には立ちどまってスマホで写真を撮ったり、誰が描いたものだと語り合いながら歩くのはなかなか楽しいものだった。すっかり気に入って、翌年も三人で訪れた。

この年も一緒に行けなかった次女が結婚することになった。今年二月次女から「会ってほしい人がいます」と告げられた。半年前ぐらいに真剣に付き合っている人がいると聞いていたので、こんな日が来るのをある程度覚悟はしていた。ただやはりあらたまって告げられると、ドキツとする。そんな動揺を隠して、えらそうに「わかった」と答えた。

それから二週間後、夫となる彼氏と食事することになった。当日の昼間、いろいろなことが頭をよぎりはじめ、不安になってきた、とんでもない男だったらどうしようと考えているうちに、だんだん落ち着かなくなってきた。レストランの前で娘と彼氏が先に来て待っていた。娘の隣にいる彼の顔に笑みが浮かんでいるのが目に入った、これで少しほっとした。

席について挨拶したあと、彼氏が「まず言いたいことがあります、お嬢さん（名前前で呼んでい

た)をきつと幸せにしますから結婚させてください」と言ってきた。まだ心構えができていないところにこの言葉だったのだが、感動してしまった。ちよつと涙がでそうになった。娘を幸せにすると言われたことがなによりうれしかった。とんでもない男だったらどうしようと、いろいろ考えていたことが馬鹿みたいに思えてきた。幸せにすると言ってくれているのである、あとはどうでもいいではないか、安心してワインをがぶがぶ飲み始めた。

彼と別れて、三人で家に帰る途中、三〇年以上前のことが思い出された。付き合っているのでもよろしくと妻の実家に挨拶に行つてから

何ヶ月後かに、いよいよ結婚申し込みのため妻の実家に向いたときのことである。当時妻の父は大手企業の重役で忙しくしていた。娘の彼氏のようにさつさと告白すればいいものの、私ほもたもたし、どうでもいい世間話を繰り返していた。「お嬢さんを幸せにしますから、結婚させてください」という言葉を、妻の両親が待っているのに、どうにも切り出せないでいた。いくじがないのである。そんなとき義父は堪えきれずに、「日取りはいつなの」と聞いてきた。義父からすれば、最大限の妥協の言葉だったはずだ。しかし私は完全に舞い上がっていた。こともあろうか「日取り」を「手取り」と聞き違えてしまったのだ。そしてご丁寧にも、「手取りですか、十数万です」と間抜けな答えをしたのである。さすがに義父はこの予想もしなかった私の答えにいらついた。「日取りだ」といさめるように強い口調で再度聞きただしてきた。

あのとき義父はどれだけがっかりしたのだろうと思うと、いまでも恥ずかしくなり顔が赤く

なつてくる。妻にその話をする、「そんなことあつたつけ」とかわされてしまった。まあいいかと思う。それより大事なことは、このおやじの間抜けな話を聞きながら、笑みを浮かべている娘が、もうすぐ嫁いでいくということだ。彼氏と一緒にの彼女の笑顔がとても幸せそうだったので、それはそれでうれしかったのだが、どこかでもう嫁いで行ってしまうのかという寂しい思いもあった。次女とは就職するまで正月とか夏休みの時に、ふたりの間では「アササン」と呼んでいた散歩をしていた。いつもより早く朝六時ぐらいに起きて、近くの海辺や旅行先を、ふたりで肩を並べて話しながら歩くだけ(朝の散歩だからアササン)なのだが、ふたりにとっては特別の行事だったように思える。三年前に娘が就職してからは、休みが不規則な勤めのため、家族そろつて一緒に休日を通すこともなくなり、アササンもそれ以来できなくなつてしまった。

式は秋になるとのこと、もしかしたらそれまでアササンができるかもしれない、そして今年こそは家族四人でほんぼり祭に行きたいと思う。娘と一緒に肩を並べて歩くことももうないかもしれないのだから。



こころにひかる物語

I・II・III

三木 卓 編 吉野晃希男 画
●各定価一、八〇〇円十税

豪華執筆陣が「あかり」にまつわる様々な思い、エピソードを綴った、本誌掲載のリレーエッセイ「こころにひかる物語」の作品集。それぞれ三十編ずつを収録。主な執筆者に、安西篤子、松村友視、俵万智、小池真理子、石原慎太郎、三浦哲郎、松谷みよ子、山田太一、児玉清、山崎洋子など。